

武蔵野日曜集会

洗足

――ヨハネ伝第12章36節～13章30節――

1968年3月17日

小池辰雄

福音は蹟きの音信 父子一如 信見一如 審判即恩恵 神の命令は永遠の生命 父言者・父行者 終末的に愛した 雲散霧消 弟子たちの足を洗う 我もし汝を洗わずば汝われと関係なし 血の潔め 贖罪の血と聖霊 本来無一物

【ヨハネ12・36～50】

36 光の子とならんために光のある間に光を信ぜよ』イエス此等のことを語りてのち、彼らを避けて隠れ給えり。37 かく多くの徴を人々の前におこない給いたれど、なお彼を信ぜざりき。38 これ預言者イザヤの言の成就せん為なり。曰く『主よ、我らに聞きたる言を誰か信ぜし。主の御腕は誰に顕れし』39 彼らが信じ得ざりしは此の故なり。即ちイザヤまた云えらく、40 『彼らの眼を暗くし、心を頑固にし給えり。これ目にて見、心にて悟り、翻えりて、我に医さる事なからん為なり』41 イザヤの斯く云えるは、その栄光を見し故にて、イエスに就きて語りしなり。42 されど司たちの中にもイエスを信じたるもの多かりしが、パリサイ人の故によりて言い顕すことを為ざりき、除名せられる事を恐れたるなり。43 彼らは神の誉よりも人の誉を愛でしなり。44 イエス呼ばわりて言い給う『われを信ずる者は我を信ずるにあらず、我を遣し給いし者を信じ、45 我を見る者は我を遣し給いし者を見るなり。46 我は光として世に來れり、すべて我を信ずる者の暗黒に居らざらん為なり。47 人たとい我が言をききて守らずとも、我は之を審かず。夫わが來りしは世を審かん為にあらず、世を救はん為なり。48 我を棄て、我が言を受けぬ者を審く者あり、わが語れる言こそ終の日に之を審くなれ。49 我はおのれに由りて語れるにあらず、我を遣し給いし父みずから我が言うべきこと、語るべきことを命じ給いし故なり。50 我その命令の永遠の生命たるを知る。されば我は語るに、我が父の我に言い給うまを語るなり』

【ヨハネ13・1～30】

1 過越のまつりの前に、イエスこの世を去りて父に往くべき己が時の來れるを知り、世に在る己の者を愛して極まで之を愛し給えり。2 夕餐のとき惡魔、



早くもシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを売らんとする思を入れたるが、³ イエス父が万物をおのが手にゆだね給いしことと、己の神より出でて神に到ることを知り、⁴ 夕餐より起ちて上衣をぬぎ、手巾をとりて腰にまとい、⁵ ついで盥に水をいれて、弟子たちの足をあらひ、纏いたる手巾にて之を拭いはじめ給う。⁶ 斯てシモン・ペテロに至り給えば、彼いう『主よ、汝わが足を洗い給うか』⁷ イエス答えて言い給う『わが為すことを汝いまは知らず、後に悟るべし』⁸ ペテロ言う『永遠に我が足をあらひ給わざれ』イエス答え給う『我もし汝を洗わずば、汝われと関係なし』⁹ シモン・ペテロ言う『主よ、わが足のみならず、手をも頭をも』¹⁰ イエス言い給う『すでに浴したる者は足のほか洗うを要せず、全身きよきなり、斯く汝らは潔し、されど悉くは然らず』¹¹ これ己を売る者の誰なるを知りたもう故に『ことごとくは潔からず』¹² と言ひ給ひしなり。

¹² 彼らの足をあらひ、己が上衣をとり、再び席につきて後いい給う『わが汝らに為したることを知るか。』¹³ なんじら我を師また主となう、然か言うは宜なり、我は是なり。¹⁴ 我は主また師なるに、尚なんじらの足を洗いたれば、汝らも互いに足を洗うべきなり。¹⁵ われ汝らに模範を示せり、わが為しごとく、汝らも為さんためなり。¹⁶ 誠にまことに汝らに告ぐ、僕はその主よりも大ならず、遣されたる者は之を遣す者よりも大ならず。¹⁷ 汝等これらの事を知りて之を行わば幸福なり。¹⁸ これ汝らすべての者につきて言うにあらず、我はわが選びたる者どもを知る。されど聖書に「我とともにパンを食う者われに向かいて踵を挙げたり」と云えることは、必ず成就すべきなり。¹⁹ 今その事の成らぬ前に之を汝らに告ぐ、事の成らん時、わが夫なるを汝らの信ぜんためなり。²⁰ 誠にまことに汝らに告ぐ、わが遣す者を受くる者は我をうくるなり。我を受くる者は我を遣し給ひし者を受くるなり』

²¹ イエス此等のことを言い終えて、心さわぎ証をなして言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、汝らの中の一人われを売らん』²² 弟子たち互いに顔を見合せ、誰につきて言い給うかを訝る。²³ イエスの愛したもう一人の弟子、イエスの御胸によりそい居たれば、²⁴ シモン・ペテロ首にて示し『誰のことを言い給うか、告げよ』という。²⁵ 彼そのまま御胸によりかかりて『主よ、誰なるか』²⁶ と言ひしに、²⁷ イエス答え給う『わが一撮の食物を浸して与うる者は夫なり』²⁸ 斯て一撮の食物を浸してシモンの子イスカリオテのユダに与えたもう。²⁹ ユダ一撮の食物を受くるや、悪魔かれに入りたり。イエス彼に言いたもう『なんじが為すことを速かに為せ』³⁰ 席に著きたる者は一人として何故かく言い給うかを知らず。³¹ ある人々はユダが財囊を預るによりて『祭



のために要する物を買え』とイエスの言い給えるか、また貧しき者に何か施さしめ給うならんと思えり。³⁰ ユダ一撮の食物を受くるや、直ちに出づ、時は夜なりき。

●福音は躓きの音信

³⁶ 光の子とならんために光のある間に光を信ぜよ』イエス此等のことを語りてのち、彼らを避けて隠れ給えり。

キリストを捕まえようとしても、キリストは捕まらないと思う時には、絶対に捕まりません。「さあ捕まえてこらん」という時には、進んで捕まる。やがて、進んで捕まる時がきますけれども。

³⁷ かく多くの徴を人々の前におこない給いたれど、なお彼を信ぜざりき。³⁸ これ預言者イザヤの言の成就せん為なり。曰く『主よ、我らに聞きたる言を誰か信ぜし。主の御腕は誰に顕れし』

これはイザヤ書をちよつと開きましようか。⁵³ 章 1 節の言葉です。

「われらが宣^{のたま}ふところを信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらわれしや。」(イザヤ 53・1)

御言は発せられているが本当に受けとられない。御業は現れているんだが、それが本当にやはり受けとられていないと。それを更に深刻な反語的な言葉で、

³⁹ 彼らが信じ得ざりしは此の故なり。即ちイザヤまた云えらく、

イザヤ書 6 章 9 節以下に出ている。

⁴⁰ 『彼らの眼を暗くし、心を頑固にし給えり。これ目にて見、心にて悟り、翻^{ひるが}えりて、我に医^いさるる事なからん為なり』

神さまがそういうようにしてしまつたような具合の書き方をしている。

イザヤ書 6 章というのは、イザヤが神の召命をうけた非常に大事なところですよ。不思議な天使の幻を見せられて、聖霊の火にイザヤ自身が唇を焼かれて、きよめられたことが書いてある。7 節のところの、

「わが口に触れていいけるは、

というのは、セラピムが飛んできてその焼け火箸を唇に付けた。

視よこの火なんじの唇にふれたれば既になんじの悪はのぞかれ、なんじの罪はきよめられたりと。我またエホバの声をきく。曰く、われ誰をつかわさん、誰かわれらのために往くべきかと。そのとき我いいけるは、われ此^{こゝ}にあり我をつかわしたまえ。

イザヤが、

「はい、こゝです。どうぞ、おつかいください」



と言えたのは、この潔めにあずかったからです。

9 エホバいいたまわく、往きてこの民にかくのごとく告げよ、なんじら聞き
てきけよ、然どきとらざるべし。見てみよ、然どしらざるべしと。¹⁰なんじ
この民のこころを鈍くし、その耳をものうくし、その眼をおおえ。恐らくは
彼らその眼にて見その耳にてききその心にてさとり翻えりて医さるること
あらん（なからんためなり）。¹¹

「なからんためなり」と。「恐らくは……あらん」という古い訳はちよつと間違えたので、「な
からんためなり」です。あまりに背いている現実に対して、神さまが、

「それではいよいよ盲者にしてしまふぞ、聾者にしてしまふぞ。生易しいことで聞
いていたつてダメだぞ。聞くには、見るには、ひとつの関門を通らなくてはいか
んぞ」

と、神の審判の心がそこに表れているわけです。福音はまさに躓きの音信です。だから、
本当のクリスチャンというのは、多かつたらどうかしているくらいなものですよ。

こういう預言者を通しての激しい言葉。しかし、それはもの凄いい恵みが隠れているから
です。

「そんないい加減なことじゃない」

ということが、こういう、

「彼らの眼を暗くし、心を頑固にし給えり。これ目にて見、心にて悟り、翻
えりて、我に医さるる事なからん為なり」

なんていう、そういう言い方をしている。

⁴¹ イザヤの斯く云えるは、その栄光を見し故にて、イエスに就きて語りしなり。

キリストが本当に見えるか、キリストが本当に聞こえるか、冗談じゃないぞと。弟子た
ちもキリストと接していましたが、本当に見ていなかった。キリストの言葉を聞いていたが、
本当に聞いていなかった。みんな躓いてしまった。そのことはキリストはよく分かっている。
一番弟子のペテロもとうとう三度まで否むようなことをしてしまった。けれども、なおそ
れを貫いて、イエスは彼らを救いあげる道を知っておられた。だから、

「今にお前たちが、私が言ったりしたことが見えたり分かるときがくるぞ」
と言われた。

⁴² されど司たちの中にもイエスを信じたるもの多かりしが、パリサイ人の故
によりて言い顕すことを為ざりき、除名せられる事を恐れたるなり。⁴³ 彼ら
は神の誉よりも人の誉を愛でしなり。

全くそのとおり。人間のいわゆる毀誉褒貶なんていうものは、この福音に接するというと、
そんなもののもうどうでもよくなってしまう。



●父子一如

44 イエス呼ばわりて言い給う『われを信ずる者は我を信するにあらず、我を遣し給いし者を信じ、

イエスは信ずべからざるもの、不可信者。面白い言い方をしている。

「我を遣わし給いしものを信じているわけなんだ」

と。こういう言葉を普通のクリスチャンは、頭の論理で理解をしているだけです。一応、この言葉を理解程度にはできます。ペテロも言った。聖霊に触れたペテロは、

「我を視よ」

言った。そしてあとの方で今度は、

「なぜ、私を見るか」

と言った。「我を視よ」とは端的に、

「わがうちなるキリストを視よ」

ということなんだが、その「わがうちなるキリストを視よ」を「我を視よ」とまで端的に言わざるをえない消息があるんです。そうしておいて今度は、躡くやつに向かつては、「なぜ、私を見るか」と今度は言う。

このキリストも神の子ですよ。罪なき人です。だから、一向差し支えないわけです、一直線にキリストを信じてても。けれども、それでありながら、イエスは、「私を信ずるものは」とは実は逆に言う、

「本当に私を信じているなら、私を信じているのではないぞ、私を遣わし給いしものを信じているんだ」

と。彼自身は手放しには、イエスといえども、手放しでは信ずべからざるものなんです。もうイエスというひとは、完全に神の中に入ってしまったというひとです。この大きな球体――円でも球でもいいですが――その球体を信じているわけだ、本当に私を信じているものとは。

「本当に私を信じているか。それは私をこの地上に遣わしたものを信じていることだ。手放しの私を信ずるということではないぞ。それくらい私と父とは一つなんだ。そのことを忘れるな」

と。父子一如の事態である。論理的に

「イエスは神の子である」

なんて言っただけ、

「神か、神の子か」

なんて、ああいう論議をすること自体がおかしい。

●信見一如

⁴⁵我を見る者は我を遣し給いし者を見るなり。

これも同じことです。イエスは不可見者である。それ自体は離して見るべからざるもの。見るべからざるものを見なくてははいかんですよ。しかしそれは、

「本当に私を見ているものは実は、遣わし給いしものを見ているんだ」

と。この机の上にあるこの花を見ているものは、「実は太陽を見ているんだ」と花は言う。

「私は太陽の光でこのようなことになっています。私を見て、太陽の光を見なかったら、それは私を見ているわけではありません」

と。そういうわけですよ。

⁴⁶我は光として世に來れり、すべて我を信する者の暗黒に居らざらん為なり。

「我を見る者」といったって構わないですよ、「見る」も「信する」も同じことですから。そういう見方が信なんだ。

「見ずして信する者はさいわいなり」

というキリストの言葉もあるけれども。本当の「見る」ということは、なにもそこに現象体がなくなつて見えるんだ、本当に「見る」というのは。これがだから、信見一如だ。信することと見ることも、これも一つだ。

信見するもの、信じ見る、あるいは信入するもの、信じその中に自分を没入するもの。これは中に入ってしまう。光の中に入ってしまうんだから。そうすると、

「暗黒に居らざるなり」

と。はい、暗黒にはいいですよ。暗黒はない。どんなにこの部屋が暗くてもいい。光がくれば必ず明るくなる。光は闇を排除するのではなくて、闇を変質させてしまう。光の世界に変えてしまう。相手を変えるものでなければ本ものでない。

光と闇とか、善と悪とか、いろいろ対立があつて、パリサイ的なキリスト教はみんなこれを「分かつ」という。それは聖書の中にもそういう「分かつ」という、「聖別」なんていう言葉があるから、困るけれども。それは現実のものと潔め分かつということはあるけれども。本当は、ただ分けてお終いではない。みなこれ変質変貌させる。だから、私はこの変質、変貌という言葉が大好きなんだ。相手を変えていくというのは、靈的变化を起こさせる。

●審判即恩恵

聖書を読むためには「まず禪宗をやつてこい」と言つた方がいいかもしれない。しかし、日本には本当に大事な精神的文化財が今までに出ていっています。聖徳太子なんてものは大変な人物ですよ。仏教の世界の一流のものを、どうぞ、皆さん、だんだん、日本の偉大な魂を勉強しなおしてください。福音の光でこれを見ていくし、またそれによつて福音の光がどれほど素晴らしいものがわかつてくる。こういうイエスの言葉というものが、何と



いう無量の響きを持つているかなあと。

47 人たとい我が言をききて守らずとも、我は之を審か^{さば}ず。夫わが来りしは世を審かん為にあらず、

本当に審いてしまえば、そうすればお終いだからね。

世を救わん為なり。

あるときは審きますよ、キリストも。

「父は子に審判をゆだねたまえり」

なんてヨハネ伝5章にも書いてある。けれども、キリストはどんなに審きましても、審きっぱなしのひとはない。キリストの審判が激しいほど、実は隠れた救いは素晴らしいわけです。審判と恩恵は、離すことができないんです、キリストの消息は。審判即恩恵とも言いたいくらいなことです。これがキリストの本願なんです。ただ「よし、よし」なんて言って、ただゆるしているのではない。ただ「よし、よし」なんていう赦しよりも、はるかに凄い赦しです。そのことは、今日やっているうちにわかります。

キリストのこの本願が世を救わんがためである。救うということは、これは人間にはなしあたわざることです。どんな偉大な道徳も、どんな偉大な哲学も、どんな素晴らしい芸術も、人ひとりの魂を救うということはできない。けれども、人間は救いを要する存在なんです、誰でもが。だから、私は

「万人は宗教人なり。信仰するの信仰しないのなんて、何をとぼけたことを言うな」

と言う。そのことに今の若い人たちが目覚めるように、そういうような本当の、教育を超えた教育が今の先生方はできないわけだな。また、牧師さんが本当にその角度から魂の震撼^{しんかん}するところの事態に入れないさらない。

48 我を棄て、我が言を受けぬ者を審く者あり、

私を棄ててしまったら、私の言葉を――「守れない」なら仕方がないかもしれないが――受けなかったら、

わが語れる言こそ終の日に之を審くなれ。

キリストの審きの言葉も、恵みの言葉も――今度は逆に言いますよ――恵みの言葉も驚くべき審きの言葉でもある。というのは、恵みを受けなかったら、それはそれ自体みずから審判を招いていることになる。

「わが言が審く」

というのはそういうことですよ。恵みの言葉が溢れているのに、それを受けなかったら、自分でもって恵みから脱落するのだから、それは審判を受けることだ。

● 神の命令は永遠の生命

49 我はおのれに由りて語れるにあらず、我を遣し給いし父みずから我が言う



べきこと、語るべきことを命じ給いし故なり。

この霊なる神のことをキリストは端的に「父」と言われる。そして、命令の世界。命令、服従の世界です。

昔の日本の軍隊がなぜ素晴らしく強かったかというところ、絶対性を持っていたからです。今はすぐ何か相対的になっていくから。天皇陛下というのは絶対的だったから。それが善い悪いは別問題ですよ。とにかく、そういった絶対的であるというところに昔の日本の軍隊の強さと、一糸乱れざるところの規律と力があつた事態を言うわけです。まあ今の自衛隊ではどうか。何も私は軍備を肯定しているわけではないけれども。

親の言うことを「はい」と聴くような子どもがなかなかなくて、すぐ何か話し合いだとか何とかいう。

「でも、こうだろ」

なんて、今度は対等の角度でものを言っている。まあ私たちの小さいときにはちよつと考えられない。私は学校から帰ってくれば、手についてお母さんに

「ただいま」

と言ったものです。なにも昔のいわゆる封建的な姿がいいわけではないけれども。神の前に本当に平伏す^{ひれふ}ということを身に付けてくれば、尊敬すべきものは尊敬すること自然に出てくる。

「父母を敬え」

というモーセの十誡もあるとおり。キリストにとつてはこの「父」は、ただ道徳的な「敬う」どころのさわぎではない。イエスは全く平伏しです。命令を受けている。主従の関係、主僕の関係。だから、イエスは僕なんです。

子でもある。信頼して父の懐にいたいということにおいては「子」である。全く寸分のズレもない一体の世界。今度は、それでただお終いなんていうものではない。それと同時に、「僕」という姿を持っている。そのためには、十字架をも辞せずしてこの十字架にかかる。

「お前は十字架にかかれ」

「はい」

と。ゲッセマネの祈りでもって、

「汝の御意を」

と。これが僕の、絶対的な使命感に燃えているところ。さっきのイザヤ書53章がこの「エホバの僕^{しもべ}」という、神の僕という旧約の最高のところですよ。

⁵⁰我その命令の永遠の生命たるを知る。

ね、楽しいんだ、この命令が。神さまの言は同時に命令なんです。神の言は同時に命令であるから。命令というのは受けとるんです。からだで受けとりますから、その言を、命令をからだで受けとったら、それは永遠の生命であつたという。



「従って見たらば、それは永遠の生命であつた」ということ。

「その命令の永遠の生命たることを知る」

なんていう表現は、いかに神の言は靈的な活言であるかというわけです。これを受けとつたら、もうその言がはたと、言われたと同時に――いわゆる「すべし、すべからず」でなくて――力が、生命がきてしまう。だから、その言を、命令を受けとることが喜びなんです。

「よーしきた」

というわけです。同時にその言が、

「神の言は靈なり、生命なり」

という。イエス・キリスト自身が、

「わが言は靈なり、生命なり」

と言われたのは全くそのとおり。神の事態がそのままイエスを通して現れた。今度は、イエスの言は、聖書の言がそのまま同質的な事態をもつて私たちに受けとつていけば、このグツと貫いた世界がそこに現れてくる。それでもう、日常生活のどういふところに向かつて、この気合をもつて進んで行く。

●父言者・父行者

されば我は語るに、我が父の我に言い給うまを語るなり』

「私が言うのは、父の言い給うまを、ありのまま、水を割らずにありのままに語ります」

と。これだけのことが無造作にキリストは言われるひとなんです。

「自分は言えない。神さまが言えということを言っている」

と。だから、彼は不言者です。言わざる者。

「自分は行なえない。やれと言うことをやっている」

と。これも不行者。不言者、不行者は――もう少しこれをしゃれていうと、この「不」の字を今度は「父」という字に代えてしまうと――父言者、父行者。父の言の者であり、父の行いの者であるということになる。父言者、父行者となる。

「自分は何も言わないと思つたら、それは父の言を言つていた。自分は何も行なえないと思つたら、それは父の行いを行なつていた」

と。いかにしてそのことが可能であるか。祈りのほかにない。いくら思つてもダメ。単なる冥想でもダメ。冥想の世界は悟りです。しかし、祈りの世界は神を受けとる世界。また、神の中に自分を投げかける世界です。

全身を投入して見る。全身を投入して聴くこと。神の姿をキリストにおいて見るんですよ、私たちはもちろん。キリストは現象体だから。キリストの中へと入つていくことが、



そういう体勢で自分をぶちまけていくことが、祈りということ。こっち側の小さな人間のお願ひではありません。

私はスッと眠くなるとサッと寝るだろ。どこでも眠れるです、電車の中でもどこでも。机に向かつていても。その時は自分をキリストにあずける気持でね。そうすると、夢の中で時々不思議なことを示されたり、ものすごい確信を与えられたりする。もう夜3時頃パッと目が覚めたりする。そうするとそこで祈ったりする。楽しくてしょうがない。それはこのキリストの中に自分を入れるくらい楽しいことはない。そして、

「どうにでもなりやがれ」

というわけです。「ああ可哀相だな」と、もう非常になにか別な世界に入ってしまう。

「ありがたいなあ」

と、もう平伏しの他なにもでもない。

今、私は「投入」と言っただけでも、もうひとつ別な言葉でいうと、今いった「平伏し」なんです、祈りというのは。投入のときには、

「万歳！」

てなぐあいには、本当に太陽に向かつて向日葵ひまわりのような姿でもあると同時に、今度は蛙のように本当に平伏す。キリストがゲッセマネで祈ったときに、大地に十字架の形をして祈っている姿をデューラーが描いた。あれが本当の平伏しの姿だと私は驚いた。

●終末的に愛した

「超越すゑのこしのまつりの前に、

ニサンの月の14日の夕方のことですが、

イエスこの世を去りて父に往くべき己おのれが時の来れるを知り、世に在る己の者を愛して極きわみまで之を愛し給えり。

非常に不思議な言葉です。

「己の者を愛して

自分に本当に付いている者、自分の身体の延長みたいな人たち、弟子たちを

極きわみまで之を愛した」

と。「極みまで」というのは、正に「終りまで」「エイス テロス」という言い方で、「終末的に」ということです、直訳すると。

「終末的に愛した」

なんていうとおかしな話なんですけれども。質的に終末性をもって愛したんだ、少し難しくいうと。質的な終末性をもって愛したのがこの「極まで之を愛し給えり」ということ。

「我は始めなり終りなり」

という。この「終り」という字が「テロス」です。「オメガ」でもいいけれども。とことん



までこれを救いあげる。この「愛する」は「アガパオー」という字が使っておりますから。「お前たちを本当に愛惜しているぞ。脱落するなよ」と。

2 夕餐^{ゆうげ}のとき悪魔、早くもシモンの子イスカリオテのユダの心に、イエスを売らんとする思いを入れたるが、

悪魔がユダの心に入った。悪魔が人の心に入るとき人の心の感情というものは、大体、妬^{ねた}みです。この妬みの感情が一番危ない。嫉妬心です。妬んだり、羨^{うらや}んだり、あるいは恨^{うら}んだり。妬み怨^{うら}みというやつ。これは同じ感情の表裏ですから、妬みと怨みは。妬みが少しこじてくるとこの怨みになる。サタンというやつがそういうやつなんだから仕方がない。サタンと同質な感情が起きれば、サタンが入ってくるよ。

「これは都合がいいな、入るには。俺の子分だ」

なんて。妬みの霊、怨みの霊、偽りの霊です。妬み、怨み、偽りというようなやつがきざしてくると、サタンに付け狙われてしまう。自分を何ものかと思っていると、それは妬み、怨み、偽りの土台になるんです、自分を何ものかと思っていると。そうすると他の何かと比較してどうのこうのとなる。そうするとすぐ、優劣の問題になって、それから、これは「不公平だ何だかんだ」ということになる。

●雲散霧消

聖霊の世界はそういう感情からは抜け出た世界です。人間だから、人間の心の中というのは、ちようにど去来する雲みたいなものだ。いろいろな形をしたり、いろいろな色になったり。人間の心の動きを一日中分析したら大変なことになるだろうね。しかし、そんな雲みたいないろいろな感情の動きを貫くもの、雲と散り霧と消してしまうところの、雲散霧消させるものが聖霊なんです。

イザヤ書の中にその「雲散霧消」という言葉があるから、申し上げておきましょうかね。イザヤ書というのは素晴らしいところですよ。イザヤ書44章21節のところに、

「21ヤコブよイスラエルよ此等のことを心にとめよ。汝はわが僕なり、我なんじを造れり、なんじわが僕なり、イスラエルよ我はなんじを忘れじ。22我なんじの愆^{とが}を雲のごとく消し、なんじの罪を霧のごとくにちらせり。なんじ我にかえれ、我なんじを贖いたればなり。」（イザヤ44・21～22）

「お前の罪はもう消してしまっただぞ」

と。雲散霧消。ここは雲散霧消と書いてある。

「雲散霧消してしまっただから、贖ってしまっただから、だから、帰ってきなさい」

と。「帰ってきたら贖ってやるよ」じゃないんですよ、これ。

「もう贖ってしまったんだから、お前さんは問題なき人になったんだから、さあ、喜んで帰っておいでよ」



と。これが福音というものです。

「とりすますことはいらん。仕事は既に私がすっかり片づけてしまったから、『まだ片付きません』なんて言うな。そのまま来なさい。ダメなまんまでよろしい。何を遠慮しているか」

と。

「しばらく集会にご無沙汰しているので敷居が高くなった」

なんて、何を言っているかと。

「どうも今日は少し調子がわるいからまあ集会は休もう」

なんて。調子が悪かろうが、何であろうが集会には来なくては。

「今日はお小遣いがないから」

なら、歩いてきなさい。それだけの捨身の求めの、

「求めよ、さらば与えられん」

という、捨身の求めが今の青年に非常に乏しくなった。日本は亡びるです、このままやっていたら。もう私もいい加減なことで学校の青年に対するわけにいかなくなってきた。

そういうユダというやつ。ユダというのは優秀なエリートな弟子ですよ。エリートな弟子が危ない。日本は霊的人物が非常に今は飢饉である。霊的人物の飢饉の時代。あなたは霊的な人格になってくださいよ。頭のいいやつはたくさんいる。そんなものは大したことではない。人間の中の最高のところは霊的人格です。キリストにしろお釈迦さんにしろ。これにかなうやつが他にありますか。彼らの特色は何ですか。霊的人格であるということです。相対的に見たってそういうことです。

●弟子たちの足を洗う

3 イエス父が万物をおのが手にゆだね給いしことと、己の神より出でて神に到ることを知り、⁴ 夕餐より起ちて上衣をぬぎ、⁵ 手巾をとりて腰にまとい、⁶ 5 ついで盥に水をいれて、弟子たちの足をあらひ、纏いたる手巾にて之を拭いはじめ給う。

これが面白い。もの凄い高次なことがまず前提になっていて、そして何を始めたかということ、たらいに水を汲んで弟子の足を洗い始めた。一体、これはどういう繋がりがあるんですか。己の神より出でて神に到ることを知り、

これから大説教でもするかと思つたら、そうじゃない。

⁴ 夕餐より起ちて上衣をぬぎ、

キリストが上着を脱いで、昔の高等学校の生徒みたいに、

手巾をとりて腰にまとい、⁵ ついで盥に水をいれて、弟子たちの足をあらひ、⁶ 纏いたる手巾にて之を拭いはじめ給う。



と。そのイエスは、まことに何でもない一番つまらないようなことをするイエスの心の世界はどうかといったら、

「イエス父が万物をおのが手にゆだね給いしことと、己の神より出でて神に到ることを深く自覚して」

という。いわゆる大きな仕事の仕事でも何でもない。マルチン・ルターが、

「明日この地球が、世界が審判にあう、焼かれてしまうという時に、私はリンゴの苗を植える」

と言った。本当の実存というものはそういうものです。

まあ、日本の大学の学生が妙なことでもって「ワッショイ、ワッショイ」とやっている。それに本当に憤りを感じて、

「然らず。我々の道はここにある」

と叫んで反対する学生がいらない。ああいうような暴力がものをいうような世界だったら、日本はお終いだ。たとえ、その動機がどのような何か純粋性であろうとも――しかし、そんな純粋性があるとは私は思いませんけれども――もうひとつ高次な世界から、イデオロギーを突き抜けた世界からのものでなければ。

聖徳太子の憲法十七条の第一条は何というか。

「和をもつて尊しとせよ」

と。その和という――「平和、平和」というけれども、お念仏になつていような、お題目になつていような平和じゃない――本当にこの和は輪に通ずるんだ。全世界を本当に円現させるところの、この精神はイデオロギーを超えたものでなければならぬ。イデオロギーにはそれぞれ善さがありますよ。しかし、その限界を持った善さというものを絶対化するところに大きな間違いがある。イエスは、

「万物を、全宇宙をおのが手にゆだね給いしこと」

と、もうはつきりと天界のキリストです。

「神より出でて神に帰る」

と、本当の栄光を受けるときがきた。そして、全世界、地の果てまでも世の末までもこの福音を、例をもつて示すべきその時がきた。そのために一体何を、その前段階としてしなければならぬか。そのことをひとつの非常に不思議な事態をもつてキリストはここに表した。足を洗うということは何でもないことだが、小さなことだが、この足を洗うということに実は、全世界を救いにもたらす消息が隠れていた。

●我もし汝を洗わずば汝われと関係なし

6 斯てシモン・ペテロに至り給えば、彼いう『主よ、汝わが足を洗い給うか』

「私の、弟子の足をお洗いになるんですか」と。



7 イエス答えて言い給う『わが為^なすことを汝いまは知らず、後に悟るべし』
今はわからないよと。後に悟るべし。今にわかる。まあいいよ、わからなくても。しかし、
わからないでoshiまいで捨ててしまったらダメだよ。後に悟る。

8 ペテロ言う『永遠に我が足をあらひ給わされ』

またペテロというのはすぐこんなことを言う。

「そんな、金輪際、洗わないでくださよ」と。

イエス答え給う『我もし汝を洗わずば、汝われと関係^{かかわり}なし』

これは福音書の中の一番大事な言葉の一つです。

「もし、私がお前を洗わなかったならば、お前は私との関わりを持たないぞ」

と、直訳するとそういう言い方ですね。私たちがキリストに今、言われているわけです。

「お前との関係は、私がお前の足を洗うというところにあるので、これを洗わなかったら、関係はないぞ。どんなに、『主よ、主よ』と言ったってダメだ。どんなに聖書を研究したってダメだ。私が足を洗うのを受けとらないことには、どんなに関係付けても、それは本当の関係でも何でもないぞ。私とお前の関係は、私がお前の足を洗うというところに本当に生ずるんだ」

という。

9 シモン・ペテロ言う『主よ、わが足のみならず、手をも頭^{かしら}をも』

「それでは、ありがたいから、足ばかりでなくて、手も頭もみんな洗ってくれ」

と。まず面白いね、この会話は。ペテロらしい言葉ですよ。

「どうも、頭もまだ臭いようですから頭も洗ってください。手も汚れていますから

手もひとつ」

なんて。

10 イエス言い給う『すでに浴したる者は足のほか洗うを要せず、全身きよき

なり、斯く汝らは潔し、されど悉^{ことごとく}とくは然^{しか}らず』

「悉^{ことごとく}とくは然らず」というのは別な人間のことです。

11 これ己を売る者の誰なるを知りたもう故に『ことごとくは潔からず』と言
い給いしなり。

ユダはダメだ。これはサタンの霊に憑かれてしまったからダメだと。

足の裏は一番下です。人間のどん底の象徴です。一番、土でもって汚れる所です。即ち、
足を洗うということにおいて、一番その人の存在の罪の根底を洗い去ることです。部分的
には部分的ですよ、もし部分というならば。まだ手も頭も顔も汚い。だから、ペテロが、

「すっかりきれいにしてください」

と言った。

一つの何か過ちをして、それを本当にキリストに赦されたら、その他のすべての過ちも



赦される。一つの過ちにおいてその人の全存在をキリストは赦すんです。

「まだ私は、このことは赦されたが、まだこっちの方は赦されていません」

なんて、そんな部分的判断ではない。福音の世界はすべて全称的判断である。それにおいてその存在全部がかかっている。今度は逆に、小指をサタンに盗られたら、全身がサタンに盗られたことになる。

「まだ私は小指だけだから大丈夫だ」

なんて思ったらとんでもない。

● 血の潔め

そういう、他はもう洗うことがない。

全身きよきなり、斯く汝らは潔し、

と。罪から、罪の赦しと同時に潔めを受けるわけです。洗い潔めるんだからね。罪を赦され、今度は潔められる。即ち、十字架と聖霊の注ぎとが、これがまた離すことができない事態を、ここに私たちはまた読みとらなくてはいいかん。

「血によつて潔める」

という言い方は、しばしばパウロの書簡の中にも出てきますが。たとえば、一番著しいところのひとつはヘブル書ですね。ヘブル書9章、贖罪のところですよ。

「然れどキリストは来らんとする善き事の大祭司として来り、手にて造らぬ

此の世に属せぬ更に大なる全き幕屋を経て、

旧約聖書の幕屋の事態です。

12 山羊と犢との血を用いず、己が血をもて只一たび至聖所に入りて、

十字架にかかつて、

永遠の贖罪を終えたまえり。

この場合、「至聖所」はもちろん十字架のことです。「幕屋」と言いましたから、そこで「至聖所」という言い方ですけれども。即ち、このゴルゴタの十字架は、その血をもつて私たちが潔められる。洗われた、贖われたと。

13 もし山羊および牡牛の血、牝牛の灰などを穢れし者にそそぎて其の肉体を
潔むることを得ば、¹⁴まして永遠の御霊により瑕なくして己を神に献げ給い
しキリストの血は、

「永遠の御霊によりて」と書いてある。

瑕なくして己を神に献げ給いしキリストの血は、我らの良心を死にたる行為

より潔めて活ける神に事えしめざらんや。

云々と。これが契約の血であつて、

22 おおよそ律法によれば、万のものの血をもて潔めらる。もし血を流すことな



くば、赦さるることなし。」（ヘブル9・11～22）

と22節に書いてある。今いちいち挙げませんが、レビ記17章、出エジプト記24章あたりを、この血の潔めのこと書いてありますから、お読みになってください。

コリント後書7章1節に、

「されば愛する者よ、我らかかる約束を得たれば、

その前に、「聖霊の宮」とされたようなことが書いてありますが。

肉と霊との汚穢けがれより全く己を潔め、神を畏れてその清潔きよきを成就すべし。」（コ

リント後7・1）

というような言葉があります。

「肉と霊との汚穢けがれ」

という。霊も、もちろんユダのごときは霊が穢れてしまったです、サタンで。いわゆるこの霊肉というものは全体的に自己本位であるときに、これは「肉」といわれる。「穢れ」といわれる。しかし、キリストに付けるときは、いわゆる霊肉共に「霊」といわれる。「霊的」とは、「神に付き、キリストに付ける」ことを霊的という。御霊に属することをいうので、いわゆる神霊的なんていうことではない。

●贖罪の血と聖霊

即ち、イエスは僕の姿をもってこの弟子たちに仕えた。そして、あのピリピ書2章にあるように、十字架の死に至るまで自分を献げた。

「⁶即ち彼は神の貌かたちにて居給いしが、神と等しくある事を固く保たんと思わず、

⁷反つて己を空しうし僕の貌かたちをとりて人の如くなれり。⁸既に人の状さまにて現れ、

己みづかを卑ひくうして死に至るまで、十字架の死に至るまで順したがい給えり。」（ピリピ2・

6～8）

と。私たちがキリストの贖罪の血によって潔められ——水で洗うのではない——キリストの霊血によって洗われることなしには、潔められることなしには、キリストと私たちの関わりがない。また、そのキリストの生命であるところの霊的な血を注がれる。これは聖霊のことです。

「わが血を飲め、わが肉を喰らえ」

というのは、

「霊的なキリストの身体を受けよ」

というのが聖霊の事態ですからね。だから、同じ「血」というものが、贖いということと、この聖霊のことを両方そこに持っています。あのヨハネ伝6章の、「わが血を飲め」というような言い方になってくると、その点が——また聖霊のことは「油」とも言われますけれども——要するに私たちが、本当に私たちのために全存在を献げ、与え、注ぎ、かくして、



罪の赦し、潔め、これをしてくださったこのキリストを受けとることがないならば、

「何の関わりがあるか」

と。本当にそのとおりです。ペテロはそのことが分からないんだ。仕方がない。やがて分かる時が来ましたが、それまでは分からない。

12 彼らの足をあらひ、己が上衣^{うわぎ}をとり、再び席につきて後いい給う『わが汝らに為したることを知るか。13 なんじら我を師また主となう、然か言うは宜^うなり、我は是^{これ}なり。14 我は主また師なるに、尚^{なほ}なんじらの足を洗いたれば、汝らも互いに足を洗うべきなり。15 われ汝らに模範を示せり、わが為しごとく、汝らも為さんためなり。』

「お前たちは私に足を洗われて赦された者だから、本質的な赦しを受け、本質的な潔めを受けたものだから、お前たちもお互いに赦しなさい。もし、赦せないならば、お前は本当に赦されているわけではないぞ」

と言う。「潔め」といったって、私たちは人を潔めるわけにはいかない。けれども、私たちを通して聖霊の働きがある。それは潔めともなるし、また、私たちの赦しがもうひとつ担いということにもなる。人を本当に担う。敵をも担ってしまう。これが

「敵を愛する」

ということです。そういった赦し、担いというようなものは、我々の中に聖霊が来ていなければできない。本当にキリストの十字架の赦しとこの聖霊のことが現実となってくるならば、必ずそういう消息が、何だかしらないけれども、湧いてきますから。人に何と言われようと一向差し支えない。

「ああ、可哀相だな」

と逆に祈れることになる。本当に今の青年諸君の魂がそういう角度の魂になってきたら、どんなに素晴らしい日本になるかと思うね。いわゆる道徳教育ではダメです。

●本来無一物

それで、しばしば引用したから皆さんはもう既にご存じの、無門関の二十三則のところの「不知善悪」というところに出てくるわけですが、あのみそすり小僧（慧能）の言葉です。

「菩提もと樹にあらず。明鏡また台にあらず。本来、無一物。」

という。

「一無位の真人あり」

という素晴らしい言葉があるが、「一無位の真人」ということと、このみそすり小僧の「本来無一物」というのが非常に相呼応するような消息です。

「何れの処^{いず}にか塵埃^{じんあい}を惹^ひかん」

と。



「鏡で鏡でない、樹で樹でない」

なんてな言い方だよな。だから、この鏡を首席の弟子の神秀というやつが、

「身はこれ菩提の樹であつて、心は明鏡台のごとしで、時々つとめてこれを拭いさる。そして、塵埃を惹かしむること莫れ」

という偈^げに対して、みそすり小僧が別なのをつくったわけだ。

「自分の中の鏡の塵をさあ一生懸命で時々払拭^{ふつしよく}しなさい」

なんてやっている世界、それは「信仰と行為」なんてやっているのと同じことだ。

「私の信仰はまだ足りませんで、私の行為はどうでこうで」

ということの問題にして、

「聖書の研究がどうでこうで」

なんて。そんなのはみんなこの神秀の角度だ。わるくはないけれども、ご苦労さんなはなしだ。ところが、このみそすり小僧の方は、

「本来何もないじゃないですか。塵がかかりようがないじゃないですか」

と。こういう「本来無一物」ということ。「あれども無きが如し」とパウロが言った。

「あれども無きが如し。無きもの」

とまで言っているとおりの。無者^{むじや}です。

悟りの世界で無の事態をとらえた、このみそすり小僧はなるほど禅宗の第六祖になった凄い魂です。そういう悟りも、それはいいさ。けれども、現実の我はまことにゴタゴタした雑物である。混沌たるカオスみたいなんんだ。

「トーフー ワー ボーフー」(形なく空しくして)

だ。この雑物をして無雑物に無造作にやってくれたひとがある。この雑物を無雑物に無造作に、作為なくしてやってくれたのがキリストである。私たちは雑物でありながら、同時に根源現実には既に足を洗われたる者である。全身を潔められたる者である。

「何を問題にしているか。私の十字架と聖霊がまだ部分的であるか。まだ足りないか。冗談言つてはいかん。」

と。そういう絶対の恩寵を、審判を——雑物は審かれる——審きを全部引き受けてしまったのが、この十字架の贖いである。全部引き受けて、さあその雑物の中にももの凄いものを、聖霊を入れてくれた。雑物でありながら、もはや無雑物の根源現実がお前の中にある。これを絶対恩寵^{じんあいに}という。それがいわゆる相対的現実にして無雑物となるのには時間がかかる。そんなことはいいよ。そんなことを気にすることはない。三日月でありながら既に満月の姿がそこに見えるかという。本当に見えますよ、あの普通の三日月でも、スーッとこつち側に。……………(以下録音ナシ)

